

## 否定辞繰り上げについて

—I don't think 型と I think not 型の語用論と機能論—

田 中 廣 明

On Negative Raising: A Pragmatic and Functional Account  
of *I Don't Think* and *I Think Not*

Hiroaki TANAKA

### Abstract

Although, as we shall see, the quarry under pursuit here can be tracked back more than half a century ago, nothing specific has been agreed within even a traditional transformational grammar on the so-called "negative raising phenomena." A semantic and pragmatic account yields diverse arguments, such as Cattell's (1973) "the umbrella of negation" and Horn's (1978a, 1989) "mid-scalar predicates" and "short-circuited implicature". However, the main argument is one: whether *I don't think* is ambiguous between *it is not the case that I think* and *I think not*, and has a sense in which it is synonymous with *I think not*.

We shall argue that *I don't think* is equivalent to *I think not* semantically and logically in that the higher clause (contradictory) negation is subsumed under the lower clause (contrary) understanding of negation. However, the (near) semantic and logical synonymy of the two types of negation is not in keeping with a pragmatic and functional account. Functionally, we can observe that the two types do not correlate each other and are used either in topic (*I don't think*) or comment (*I think not*). Pragmatically, as is claimed by Jespersen and Bolinger, *I don't think* strikes us as a bit weaker and milder in negative force than *I think not*.

Finally, we shall point out that a unified theory cannot be maintained without seeking such diverse matters as syntactic, pragmatic and functional account, i.e. no one theory cannot be maintained.

## 1. はじめに

本稿では、否定辞繰り上げ現象について以下の点から考察する。

- (1) a. 否定辞繰り上げは、統語的に存在しないという議論が多いが、では、意味論的にはどうなのか。  
b. I don't think 型が無標 (unmarked) とすると、I think not 型は有標 (marked) なのか。あるいは、意味論的、語用論的、機能的に 2 つは同義なのか。同義ではないとすると、違いは何か。

(1)の疑問点に対して次のような答えを用意している。

- (2) a. 否定辞繰り上げは、統語的には存在しない。意味的には主節の否定が従節に及んでいるという立場をとる。  
b. I don't think 型と I think not 型には違いがある。ただし、それは語用論的、機能的違いであり、意味論的 (論理的) には両者は同義であるとする。  
c. 語用論的には、I don't think 型が「ほかし表現」、I think not 型が直接的な表現であるとする。機能的には、I don't think 型の従節が topic、I think not 型の従節が comment を表すことを述べる。

以下、第2節では、I think not 型について考察する。主に機能的な側面からの考察が中心となる。2.1節では、I think not 型がその意味構造から、機能的に「否定の主張」を表していること、2.2節では、I think not 型の従節が comment で、I don't think 型が topic であることを主張する。2.3節は I don't think so. と I think not. の違いである。第3節は I don't think 型について、語用論的、意味論的な側面から考察をする。3.1節は付加疑問との関係である。3.2節は否定辞繰り上げ述語について、否定辞繰り上げが意味論的に存在するのか (3. 2. 1)、否定辞繰り上げ述語になることができる資格は何か (3. 2. 2) について扱う。第4節はまとめである。

## 2. I think not 型

### 2.1. 否定の主張

筆者は試みに、(3)(4)の I think not 型を I don't think 型に変えることができるかどうか、インフォーマントに尋ねてみた。(3)(4)は I don't think 型にすることが可能という反応をインフォーマント (9名) から得た。では、(3)と(4)で、I don't think 型と元の I think not 型の違いは何であろうか。まず、I don't think 型を I think not 型にすると、太田 (1980)、中右 (1994) のいう、法的な、ぼかし表現としての機能がなくなる。文字通りには、「not-P と思う (P は従属節の命題)」と言っているのであるから、否定の主張を意見・判断として述べていることになる。例えば、(3)を I don't think 型に変えると、「性行為が大統領の業績などに影響がない」という否定の主張が、確固たる自信がない主張となる。筋の通った、経験に裏打ちされた意見というより、弱く、単なる憶測にすぎなくなると、インフォーマントの一人はいう。<sup>1</sup>

(3) **Interviewer:** If President Clinton did have sex in the White House with Monica Lewinsky, how serious is that, do you think?

**Jimmy Carter:** That in itself is not serious at all, as far as legal aspects are concerned, or as far as his performance of his duties are performed. And if you notice, none of the allegations that are now being considered by Chairman Hyde and the House Judiciary

---

1 Sheintuch and Wise (1976) は、I don't think 型と I think not 型について、Jespersen (1917) や Bolinger の説明を援用し、否定が繰り上げれば (I don't think 型)、話し手の確信度は減じる (不確かさ(uncertainty)が増す) と述べている。この uncertainty という意味は、Horn (1978a, 1978b, 1989) でも繰り返し述べられている。太田 (1980: 523) は、Sheintuch and Wise の例をあげ、I don't think he is honest. より I think he is not honest. のほうが彼が正直でない話し手が確信している度合いが低いと述べている。Sheintuch and Wise はまた、否定辞牽引(negative attraction) について述べ、no より not any のほうが確信度が高いとしている。それゆえ、??I think she eats nothing for breakfast. より I think she doesn't eat anything for breakfast. の方がよいという。nothing を使えば、確信度が高いことになり、I think という表現と相容れないことになる。そのほか、否定辞が左に来れば来るほど、want, appear などでは主文のコントロールが減じ、seem, appear などでは補文に対する話者の直接的な知覚になることをあげている。

Committee have anything to do with sex. They involve not telling the truth, and they involve possible abuses of power, and so forth. So legally, **I think** the sexual acts, if they did occur, **don't** have any impact on his performance of duty or on the legalities of the impeachment hearings. — *English Network*, 1999年4月号(アルク)  
 (インタビューアー：もしクリントン大統領がホワイトハウスでモニカ・ルインスキーとセックスをしていたら、それはどれだけ深刻だと思いますか？カーター：①それ自体は全く深刻ではありません。あるいは、彼がきちんと職務を遂行している限りは。そしてお気づきになりましたか、②現在ハイド委員長と下院司法委員会が審議している申し立ては、セックスには関係ありません。③それらは、真実を語らなかったことや、職権乱用の可能性などについてのことなのです。ですから法的には一性行為がかりにあったとしても、④それは大統領の業績や、職務や、弾劾聴聞会の合法性には影響がないと思います。)

では、この文脈で I think not 型が適切なのはなぜであろうか。それは、文脈の流れ（カーター元大統領の言葉の流れ）から答えを見つけだすことができる。番号をふった①→②→③→④の流れを順に考えてみると、カーター元大統領は、①「モニカルインスキーとのセックスは重要ではない」、なぜなら②「申し立てがセックスに関係ないからである」、つまり③「申し立ては嘘を述べたことや、職権乱用についてである」、それゆえ④「セックスは大統領の業績などに影響がない」と述べている。このように見ると、①、②、③は④へ至るまでの前提条件であり、最後に否定の主張をする条件として一貫性があると考えられる。①、②、③と④は同じことを主張していることになる。

あるインフォーマントによると、(4)も否定の主張を述べており、アメリカの子供たちはうぶであるという一般的な想定に対して、そうではないと私は考えているという意味であると言う。

(4) **Interviewer:** As a children's author, I'd like to ask you, Mary, what kind of message does this affair send to the children of America?

**Mary Ryan:** Well, unfortunately or not, as the case may be, I think the children of America are growing up in a very worldly time. Half their parents are divorced. They have probably heard similar issues, or overheard similar issues, being discussed in one of their

several homes. Um, they watch *South Park*, they tune in to the Internet. ***I think*** the children of America are ***not*** the blushing innocents that perhaps my generation was supposed to be. — *English Journal*, 1999年1月号(アルク) (インタビュアー：メアリー、子供向けの本の作家としてあなたにお尋ねしたいのですが、今回の出来事(クリントン大統領の不倫疑惑)は、アメリカの子供たちにどのようなたぐいのメッセージを送っているのでしょうか？メアリー・ライアン：そうですね、幸か不幸か、それは場合によりけりですが、①アメリカの子供たちはきわめて俗っぽい時代に育っていると思います。②彼らの半数の両親が離婚しています。③彼らはおそらく似たような問題について耳にしたり、そういったそれぞれの家庭で、似たような問題が話し合われているのを小耳に挟んだりしているのではないのでしょうか。そう、④彼らは「サウスパーク」を見て、インターネットをやっているんです。おそらく私の世代がそうであったと考えられているほど、⑤アメリカの今の子供たちは、すぐに顔を赤らめるようなうぶではありません。))

(3)と同じような流れが、(4)にも見られる。①「アメリカの子供は俗っぽい時代に育っている」、その証拠に②「両親の半数が離婚」し、③「似たような問題を耳にして」おり、④「『サウス・パーク』(アメリカのケーブルテレビで人気を博しているコメディアニメ。かわいいキャラクターが受ける一方で、下品な言葉遣いや暴力的なシーンが批判を浴びている)を見たりインターネットをしたり」しているので、⑤「アメリカの今の子供たちは、すぐに顔を赤らめるようなうぶではない」という流れから、(3)と同じように、否定的主張をすることができ、I think not 型が使われている。

あるインフォーマントによると、I don't think 型を使えば意見・判断を丁寧に述べることになり、I think not 型はよく考えられた、しっかりした意見・判断をいうことになるという。例えば、自分の意見で他人を説得してその人の気持ちを変えさせたいときなどは、I think not 型となる。このことを実例で検証してみよう。

- (5) Phil usually went alone and kept to himself, sitting in a corner and passing the time by nursing his favorite grudges. But he decided he wouldn't mind company in return for free drinks, even though he

made good money at his job. Phil was like that. Now he wondered if it was worth it, having a screwball for company. He really didn't take the offer seriously, but he began to feel uneasy. When he finally got the coughing under control, he realized that Pete (all he gave was his first name) was still waiting for an answer— he didn't even seem to wink as he continued to stare. Haney managed a weak laugh. "Guess I can't think of anyone, Pete. Thanks anyhow". A faint crease appeared between the man's eyebrows. "***I think*** you ***aren't*** taking me seriously, Phil. I meant it. And everybody has some kind of grudge. I might have got hit by that truck if it wasn't for you. I believe in returning favors. I'll do anything for somebody I like. It won't cost you a cent, Phil. Go ahead and try me!" — LOB Corpus L23

(5)は命を助けられたと思っている男 (Pete) から、「私の言うことを真剣に聞いていない、本当にお返しがしたいのだ」と申し出を受けている場面である。ピートは否定命題「君は真剣に聞いていない」を自分の考えとして述べることに、その主張から生じる含意「だから聞いてくれ」すなわち、相手であるフィルの気持ちを変えさせようとしている。結果的に、フィルは「わかった」とピートの言うことを聞いている。

このように、否定の力ということになると、I don't think 型より I think not 型のほうが強い(Quirk, *et al.* (1985: 1033))ということになる(ただし、Quirk, *et al.* (1985: 1033-1035) は I think not 型は直接には扱っていない)。(3)と(4)で I don't think が可能だとしたインフォーマントの多くは、I don't think のほうが弱く、より丁寧で、口語的としている。ところが、I think not 型のほうが丁寧でなく、ぶしつけな言い方かということとそうでもない。その例が小西(1964: 132-133) にあがっている。

- (6) "My dear Watson, you would confer a great favour upon me by coming. And ***I think*** that your time will ***not*** be misspent, for there are points about this case which promise to make it an absolutely unique one." — Conan Doyle, *Silver Blaze* (「ワトソン君、来ていただければ実にありがたいのですよ。そして、時間もむだにはならないと思います。と申しますのは、この事件には全く前代未聞の事件に発展しそ

うなところがありますからね。』)

小西 (1964: 132-133) は、「また次の例のように、婉曲的な I don't think というより、断言的にこの語法 (筆者注: I think not) を使ってきっぱり述べる方が、相手にたいし安心感を与え、逆に内容によっては、好意的になることにも注意すべきである」と述べている。これは、相手の否定的顔 (negative face) を損ねない方法が、この場合は直接的な否定であるということになる。

では、はっきりと否定的な意見を述べる場合はどうすればいいであろうか。以下の例を考えてみよう。

(7) **Interviewer:** Beyond yourself being a Democrat, do you think that Clinton still has the moral authority to lead this country?

**Brittany Mercer:** Well, I'm *of the opinion* that moral authority *isn't* necessarily a prerequisite for running a country. I mean, history has shown that they've been presidents who haven't been of high moral standing that have been quite capable and able to run the country, *I think* he's been an excellent president, and *I don't think* his morality has anything to do with his ability to be president. — *English Journal*, 1999年1月号 (アルク) (インタビューアー: ご自身が民主党員であるという立場を越えて、あなたは、クリントンには、まだこの国を率いて行くための道徳的な権威があると思いますか。ブリタニー・マーサー: そうですね、道徳的な権威は必ずしも国政を司るための必要条件ではない、と言うのが私の意見です。つまり、有能であり、国政を司る能力を持ちながら、道徳面での評判がよくなかった大統領がいたことを、歴史はすでに示しているということです。彼は、優れた大統領であり、彼の道徳観念は大統領としての能力とは何の関係もないと思います。)

自分の否定の意見を主張したいとき、この話し手は、of the opinion という言い方を使っている。I'm not of the opinion...では、意見そのものを持っていないととられる恐れがあるからである (I don't think との比較については後述)。I'm of the opinion には、I think が持つ弱い法的な、緩衝的な機能はない。むしろ、意見の主張という強い意味である。

## 2.2. topic と comment

ここでは、I think not 型が否定の主張を意見として述べるためには、こちらの従属節が comment (評言) を表し、I don't think 型の従属節が topic (話題) を表すことを主張する。<sup>2</sup>

Bublitz (1992: 567-569) は、I don't think 型の否定について、この否定は rhematic splitting (評言分離) という過程を経た、quasi-thematization (疑似話題化) を表すとしている。まず、rhematic splitting についてであるが、これは rheme を表す否定辞 (not, no) が、I don't think 型では、文の始め、すなわち theme を表す位置に来てしまい (英語では、文の始めの方が theme、文の終りの方が rheme を表すとする)、本来の (否定辞繰り上げがかかる前の) 従属節であった not-P の rheme の位置からは分離されてしまっていることをいう。そうすると、否定を本来の rheme の位置から移動させれば、rheme それ自体が持つ (新情報であることからくる) 意外感、目新しさを和らげる働きをする。この rheme を取り除かれた従属節が quasi-thematization (疑似話題化) の過程に至ることになる。疑似といえども theme (話題) になった従属節は、not-P が本来表していた矛盾、拒絶、疑い、修正などの発話行為を目立たなくし、聞き手に受け入れやすくしていると言える。以上が、Bublitz (1992) の議論である。Bublitz が I don't think 型を一種の theme としているのは正しいと思われる。ただし、具体的な例証がないことと、I think not 型への言及がないことが難点としてあげられる。ここでは、theme は topic に、rheme は comment にあたる。以下では、topic/comment と言っても一概に新/旧だけでははかれないこと、さらに段階性を設けて考える必要があることを指摘する。

次の例を考えてみよう。

(8) **Interviewer:** Well, what is the gay agenda—gay and lesbian agenda?

**Tina Podlowski:** *I think* there really *isn't* an agenda. I think it's —the needs of the community are as diverse as the community. —

---

2 topic とは、「文頭で現在何について話しているか」を表す theme (主題) (Halliday (1994: 37ff)) の定義から「文頭で」を除いた意味で使っている。旧情報である場合が多いが、初めて出てきても、それが談話の主題になっていれば topic である。comment とは、「文のあとのほうで、主題について述べていること」を表す rheme (評言、説述) から「文のあとのほう」を除いた意味である。新情報であることが多いが、本文中で指摘するように、その談話全体が話し手が言いたいことであればいい。(cf. 村田(1982))



*English Journal*, 1999年4月号 (アルク) (インタビューアー: さて、ゲイの政策、ゲイとレズビアン政策とは、何なのでしょう。ティナ・ポドロドウスキー: 実際のところ、政策などないと思います。(同性愛者の) コミュニティーの要求というのは、コミュニティー (そのもの) と同じように多様性に富んでいると思うんです。)

「政策は何か」と尋ねているのであるから、その政策はあるという前提に基づいて問えるのが本筋である。ところが、この話し手は「政策そのものがない」ことを新しく主張している。否定の主張を目新しい、期待とは違った考えとして提出している。その点で、この従属節は comment ということができる。ただし、(8)の I think not を I don't think にすると、ほぼ OK であるという結果だった。これは、topic/comment の区別が容認度に影響を与えるほどではないことを示している。あるインフォーマントは、元の I think not では、Tina Podlowski の否定の主張は強い反論で、インタビューアーに論争を挑んでいる感じがし、I don't think とすると、インタビューアーに彼女の反論と同調してほしいという感じが出るとした。I don't think は相手のメンツをつぶさない反論の仕方、「政策はない」という主張が、インタビューアーにも前もって分かっていた topic 的なものと感じられるからであろう。

次の(9)も同様である。

- (9) **Interviewer:** So do you recognize the responsibility that you carry as a filmmaker, as a Native American filmmaker?

**Chris Eyre:** *I think* the question *isn't* in response to my movie. I mean, if you look at my movie, it's totally a self-conscious movie.  
— *English Journal*, 1999年8月号 (アルク) (インタビューアー: では、あなたは映画製作者として、アメリカ先住民族の映画製作者として、背負っている責任を認識しているのでしょうか。クリス・エア: その質問は、私の映画に対応していないと思います。つまり、私の映画を見れば、それは完全に自己の存在を意識した映画だからです。)

(9)も(8)と同じように、質問そのものがおかしいと言っており、質問には答えていない。Yes(, I think so) なら「責任を認識している」、No(, I don't think so) なら「責任を認識していない」と、「責任を認識すること」が旧情報、すなわち topic になるはずであるが、ここでは、質問そのものに疑問を投げかけているの

であるから、新情報すなわち comment になる。あるインフォーマントによると、(9)は「その質問が映画に合っていない」と言って質問に答えないこと自体がおかしく、一種の応答エラーのようなのだとさえ言う人もいる。I think で始めたので、仕方なしに否定を言ってしまうとする人もいた。(8)と同じように、I don't think も可能である。

では、次の(10)のように I don't think で答える場合と、(8)(9)を比べてみよう。

- (10) **Interviewer:** Was it more difficult to attain your position as a lesbian, and do you find that some people still reject you just because of your sexual orientation?

**Tina Podlowski:** *I don't think* it was more difficult to get my position. — *English Journal*, 1999年4月号(アルク) (インタビューアー：レズビアンとしてあなたの地位を確保するのは(異性愛者の場合より)困難でしたか。そして、あなたの性的指向だけを理由に拒絶している人がいると思われますか。ティナ・ポドロウスキー：自分の地位を手に入れるのがより困難だったと、私は思いません。)

この場合の従属節は、疑問文で聞かれていることであり、topic すなわち old information である。これは、エコー的な否定と考えられる。ここでは、インタビューアーは、実際には Tina の考えを聞いていると理解され、I think not はおかしいというインフォーマントがいた。ちゃんと否定すれば、I think it was no more difficult to get my position. となるとする人もいた。

従属節が肯定であろうと、否定であろうと、話し手は、前もって従属節の内容を考えたりせず、線条的 (linear) に、まず I think と言ってから話を始めることがある。ところが、こういった場合でも not-P (P は従節の命題) に comment 的な意味を見てとれることがある。

- (11) **Khan:** And a question for you, Bob. It says... and the... ca... ca... caller says, "Will Asia ever consider one currency?"

**Broadfoot:** I think that they'll consider it, but I just don't think that they're going to do it... in my lifetime. I think that the one currency that Asia's already considered is the U.S. dollar, and by staying linked to that one for too long, it... it helped precipitate some of the problems we... we've had to date. So while they've already... The

finance... The Head of the... The Financial Secretary of Hong Kong came out the other day and suggested we should start thinking about it. ***I think*** it's... it's... it's ***not*** gonna happen at any time soon. — *CNN English Express*, 1999年4月号 (朝日出版) (カーン：あなたへの質問です、ボブさん。それは…そして…視…視…視聴者の質問は「アジアはいずれ統一通貨を考えるのでしょうか」というものです。ブロードフット：考えると思いますが、わ…①私が生きているうちにそうすることはないでしょう。私が思うに、アジアがすでに考えている統一通貨は米ドルですが、米ドルと長い間リンクしてきたために、それ…それによって、②いくつかの問題に陥ることになったのです。すでに…財務…長官…③香港の財務長官が先日公の場で、統一通貨を考え始めるべきだと言っていました。私の考えでは、それは…それは…④それはすぐには始まらないでしょう。)

このロードフット氏の発話は、①「私が生きているうちには統一通貨は始まらない」、なぜなら②「(実質的な統一通貨である) 米ドルが問題に陥った」からである、ただし③「香港の財務長官が統一通貨を始めるべきだと言った」、それでも (①で言ったように) ④「統一通貨はすぐには始まらない」という流れになっている。最後の④は①と同じ内容であるから、目新しくなく、聞き手はよく分かっている内容である。それだけを取り上げると、あたかも topic のような働きをしていると思われるかもしれない。しかし、実際には、これは comment である。なぜかという、①は彼がもっとも言いたいことであり、その流れに沿った④も彼の主張一部をなしていると考えられるからである。主張の一部と言うことは、全体を通してみると、新しい内容であり、comment といえることができる。このように、ある comment が全体の comment の中に組み込まれた comment となることもできる。新旧と comment/topic (= rheme/theme) については、村田 (1982: 220-223) が、topic (theme) と old information は一致しないと述べている。同じことが comment (rheme) についても言え、comment (rheme) と new information は必ずしも一致しない。つまり、④の主張は①との関連では「旧」であるが、全体の流れでは「新」なのである。

同じことが(3)(4)の文脈の流れについても言える。それぞれ最後の否定の主張である④、⑤は①との関連では「旧」であるが、主張としては (全体の流れでは) 目新しい「新」の情報である。

これに対して、I don't think 型はどうであろうか。(7) (採録)で考えてみる。

- (7) **Brittany Mercer:** Well, ① I'm *of the opinion* that moral authority *isn't* necessarily a prerequisite for running a country. I mean, ② history has shown that they've been presidents who haven't been of high moral standing that have been quite capable and able to run the country, ③ *I think* he's been an excellent president, and ④ *I don't think* his morality has anything to do with his ability to be president. —*English Journal*, 1999年1月号 (アルク)

(7)も(3)(4)(11)と同じ流れが考えられるかもしれない。なぜなら、④の「クリントンの道德観念は大統領であることと関係がない」ことを①から首尾一貫して主張しており、全体として「新」だと考えられるからである。では、なぜ *I think not* ではないのであろうか。おそらくは、一つには③の *I think* との対照から、同一の言い方で始めなければならない要請が働いた結果であろう。もう一つは、(こちらが重要であると思われるが) 聞き手にとって、④の内容が「既知」として十分認知されるかどうかである。この内容が、聞き手に十分伝わっているかどうかである。「あなたにとってはもうすでによくお分かりのように、私は…とは思わない」と補って考えたらよい。聞き手に伝わっていない、まだまだ主張する必要があると思ったときは、*I think not* 型を使うことになる。ただし、この選択はまったく話し手に任されており、恣意的なものである。通例、(11)のような *I don't think* 型が多いのは、よく指摘されている通りで、聞き手との対人関係をうまくやろうとする、話し手の側の語用論的要請が働く結果であろう。

主張を首尾一貫して述べることから来る comment としての働きは、次の例で again があることで、さらに検証することが出来る。

- (12) Of course there are many angel images all around us right now here in Japan. Angel stores, angel music, “angel” used for names of things. It's amazing how much it appears in the English form of angel. And I think, as is often the case in Japan, there's a surface approach first. Picking up on the popularity of angels in the West, many Japanese have gone at it from a commercial angle because of course it's cute, angels can be charming. They make nice post cards and they make nice wall hangings. And they do. I happen to have some myself and I like them, but *I think, again*, there's *not* as much understanding of what an angel means. —*English Network*, 1995年3月号 (アルク)  
(Interview with Valerie Koehn: 日本における天使像) (現在、ここ日本

でも様々な天使のイメージが私たちの回りに存在しています。天使ショップや天使の音楽、ものの名称として「天使」の名を使うこともありえます。(しかも) 天使が英語 (つまりエンジェル) でたびたび登場することに驚きます。そして、日本ではよくあることですが、まずは見かけから入っていくのだと思います。欧米で天使が人気を呼んでいることを知って、多くの日本人は商売の見地からそれに手を着けたわけです。なぜなら、天使はとてもかわいいし、とても魅力的な存在でもあるからです。いい絵葉書になりますし、すてきな壁飾りにもなります。本当にすてきなものばかりです。私自身いくつか持っていますし、気に入っています。しかし繰り返しますが、天使の (本当の) 意味については、あまり理解されていないように思えます。)

I think not の前の文脈は、「天使のことはあまり理解されていない」ことを主張するための具体的な例証となっている。聞き手に分かってもらっているかどうか自信がないので、この箇所より前で主張していることを、もう一度言葉を換え、again で主張している。これが、聞き手に確固たる信念として確立していると話し手が見なせれば、topic となり、I don't think が用いられる。

Bublitz (1992: 560) は、Svartvik and Quirk (1980: 574) と LLC (London-Lund Corpus) からこのタイプをそれぞれ 1 例ずつあげ、I don't think と対照的に論じている。I don't think が話し手のメンツをつぶさない柔らかい言い方であるに対して、(13) は、明らかにぶしつけな言い方で前言と矛盾する態度を示し、(14) は好意的でない批判を含むとしている。Bublitz は 1 文しかあげていないので、それぞれの箇所から、前後を補って(13)(14)として採録してみる。

- (13) A: ...whether it be under United Nations auspices or some other things....  
 f: yes personally I would welcome United Nations auspices  
 <<gosh>>  
 A: m. yes quite I think a lot of people would..  
 B: I think ...*I think* just at the moment as it were the British *couldn't... couldn't* do that for political reasons. I mean that it's... I mean I think generally in the country.  
 A yes but suppose they have to do it in the end. why not do it now.  
 B: ah because the political reasons involved....

—Svartvik and Quirk (1980: 574)

- (14) A: is there any connection between all these people were they writing in different centuries people you have mentioned so far—  
 B: well Marlowe was a little a little after Shakespeare. *I think* you *haven't* got very much sense of perspective you know and this is going to hold you up terribly in your English work things that we expect to be able to take for granted. —LLC3 1b

(13)の couldn't do that の do that は「国連の援助を歓迎する」ことである。それが、f と A の意見に反して、「自分はイギリス人が歓迎できなかったと思う」と相手の対面をあえて傷つけて述べている。(14)でも「相手はいい見方をしていない」と辛らつに批判し、そのため「イギリスに関する仕事でひどい状態にさらされるよ」と忠告している。この両者に見られる強い、直接的な意味はどこから出てくるのであろうか。両者とも、相手の思いも寄らない、新しい内容を主張していることに注意すべきである。(13)では A と f に賛成しても良さそうなのに、自分の意見は違うのだとあえて述べている。(14)も相手にとってきつい内容を、新しい自分の意見として述べている。これらが、前もって予想できるような事柄なら、辛らつ感といった調子は出てこない。まさに comment として働くからこそ対人的に強い調子が出るのである。

このように、話し手が従属節を新しい情報と感じていれば I think not 型が使えることになる。以下の Graham Greene の短編からの例は、小説全体の流れを頭に入れておかないと解決できそうにない。

- (15) I could hear them talking while they found their coats at the back of the restaurant. He said, 'I wonder what all those Japanese are doing here?'  
 'Japanese?' she said. 'What Japanese, darling? Sometimes you are so evasive *I think* you *don't* want to marry me at all.' —Graham Greene, *The Invisible Japanese Gentlemen* (*May We Borrow Your Husband?* 中の短編1967年)

編注者の照屋佳男氏の解説によれば、この作品は以下のような内容である。「小説家の”私”はロンドンのあるレストランで、小説第1作を出したばかりの女とその婚約者との会話に耳を傾けている。窓際に座っているこのカップルと“私”

との間に介在するかのように、8人の日本人男性が魚料理の夕食をとっている。慇懃な微笑を顔に浮かべ、しきりに軽くお辞儀をし、“私”に全く不可解な言葉をしゃべるこの男性たちの存在は、“私”の注意を引かずにはおかない。ところが、小説家をもって自ら任じ、おのれの観察力を誇っている女の目には、恰好な観察の対象であるはずの日本人男性がどうしても見えない。女には鼻の先にあるのが見えないのである。女に見えるのは未来のことだけである、と“私”は的確に見抜く。20歳を過ぎていそうもない女は、男に向かって自分の本の売れ行きのこと、結婚のことをしきりにしゃべる。作家には耐えねばならぬことがたくさんあると言うことにも気づかず、夢と空想をほしいままにする女は、写真のモデルにでもなった方がいい、と“私”は思う。グリーンの円熟した心の状態が伝わってくる短編」(*Past, Dream and Reality— New British Writing*, ed. by Yoshio Teruya, Nan-undo, 1990, p. 83)。(15)はこの短編の最後の部分で、them は女と婚約者の男のこと、男が初めて日本人のことを言ったのに対し、日本人が目に入っていなかった女は、「時々あなたは、話をひどくそらせて、私と結婚したくないと思ってしまうわ」と言っている。日本人が目に入らないくらいに自分のことしか考えていない女は、男が結婚に不安を持っているに気づきもせずに、話をしている。つまり、男が結婚をしたくないと言うことは、彼女には考えてもみないことなのである。

Bublitz (1992: 559-560) が述べている反対の I don't think 型はどうであろうか。

(16) A: well we were saying [...] that [...] Tom Walker's combination of drama and the eighteenth century--might be something to be looked for among these applicants.

C: m

A: but... I don't suppose anybody feels a certain absolute necessity for that  
[...]

B: no and *I don't think* it very likely(,) it's very unlikely.

—Svartvik and Quirk (1980: 525)

A の that、B の it は「トム・ウォーカーが演劇と18世紀を組み合わせたという応募者の中に見られるべき観点」を指す。Bublitz (1992) は、B が最後に it's very unlikely と言っているのは、そうした観点は見られないことが分かっているためであり、それでも不確かであることを表す I don't think 型を使っている

のは、相手の発言の自由を損ねる直接的な言い方を避ける方策であるとしている。対人関係を重視した解釈はそれはそれで正しいと思われるが、ここではむしろ、it's very unlikely と言えるだけ十分に従属節の内容が topic である、あるいは既知であるからと考えられる。A が前もって、「演劇と18世紀の組み合わせを誰も必要だと思っていない」と言っているのであるから、B も相手の顔をつぶさないように、「そんなことがありそうにないのはよく分かっているからそう思う」、「あり得ない」と述べるのは自然のことである。

### 2.3. I don't think so. と I think not.

I don't think so. と I think not. の違いは、I don't think so. のほうが普通の言い方で、I think not. が堅い (formal) 表現であるとされている (CIDE; Eastwood (1994: 48); Swan (1995:354))。また、Activator のように I think not. はイギリス英語とする辞書もある。これらは文体的な違いであるが、中右 (1994: 182-188) は、階層意味論の立場から、この二つの違いを次のように説明している。

(17) A: Margaret won't be coming to the party then, will they?

B: No, {a. I suppose not. / b. I don't suppose so.}

中右 (1994) は、I suppose not. の直後に空照応形  $\phi$  があると仮定し、その空照応形と、I don't suppose so. の so が何を指すか議論している。前者に so ではなく、 $\phi$  を仮定した証拠に、I suppose not so. とは言えないこと、not が主節に繰り上がらない限り従節に so. とは言えないことをあげている。そうすると、(17B) の (a) の I suppose not  $\phi$ . の  $\phi$  は、A の疑問文から not を除いた命題である Margaret will be coming to the party. を指すことになる。これを、中右は中立命題と言っている。次に、(17B) の (b) の I don't suppose so. の so は何を指すかという問題である。可能性として二つある。一つは、否定を含んだ Margaret won't be coming to the party then、もう一つは含まない Margaret will be coming to the party then である。前者なら、答えが I don't suppose Margaret won't be coming to the party then となってしまう、文意に合わない。そのため、後者の I suppose not. の場合と同じ中立命題ということになる。厳密には、 $[_{SM}I \text{ DON'T SUPPOSE}]$   $[_{P4}POS$   $[_{P3}SO]]$  (SM は中右のいう S モダリティ、P4 は全体命題、POS は positive proposition (肯定命題)、P3 は中立命題) となるため、I don't suppose の従節は so の中立命題を肯定命題にした形式である。それに対し、(17B) の (a) の I suppose not. は  $[_{SM}I$



SUPPOSE] [<sub>P4</sub>NOT [<sub>P3</sub>φ]]ということになり、suppose の従節は φ に NOT を上乗せした否定命題になる。これは、I suppose not. が「来ないと思うよ」で否定命題の主張であり、I don't suppose so. が「来るとは思わない」でモダリティ否定であることを述べたものである。中右 (1994: 188) は、これらの二つは「意味構造は明確に異質であるにもかかわらず、素朴な日常感覚のもとでは、同じ伝達機能を果たすものと解されるのである」と述べ、実質的な違いはないとしている。

では、以下の2例を比べてみよう。

- (18) The butt of the Smith & Wesson was slapped viciously against the side of his knee. 'That'll do to start off with.' Light moved back, waiting until Loddon's involuntary tears of agony had stopped. 'Feel like being civil, friend?' 'If you put that gun down—' 'I'm taking you —' '*I think not.*' The voice from the door brought round the heads of the three men. —LOB L17

筆者のインフォーマントによれば、(18)を I don't think so. とすれば、ロドン を救いに突然入ってきた声の主の持つ緊迫感 は明らかに薄れるという。I think not 以下を補うと、前の言葉を遮っているため文字通りには I think you are not taking him... としか考えられない。中右の意味構造上の分析ではここまでであり、それはそれで正しいと思われるが、前節で述べたように、I think not 型の comment としての機能が持つ意外感、きつい感じがここでも生じていると考えることができる。つまり、突然遮って入ってきた声が「お前にはそんなことはさせない」と言っているのであるから、その否定の主張自体はこの場の誰にとっても意外であり、新情報である。通常の「疑問」対「答え」になっていないのである。

それに対し、I don't think so はどうであろうか。

- (19) Because she felt such a stab of guilt she said quickly: "He's the greatest fun in the world. And I will bring him one day." She'd be grey-haired by the time he was old enough and probably still a spinster. "Will you bring Peggy, too?" she asked. He hesitated, then he shook his head. "*I don't think so.*" She finds going abroad too complicated. She's content with Britain." —LOB P20

(19)は通常の「疑問」対「答え」である。so は I will bring Peggy too ということであり、その内容は前提として前文の疑問文で述べられている。つまり、so の内容は topic ということになる。そのため、その内容を和らげるために I don't think と用いていると考えられる。答え手が「彼女は外国へ行くのがあまりにも難しいと思っている。イギリスで十分満足している」と理由を述べ、質問者に不愉快にならないようにしているのはそのためである。

### 3. I don't think 型

#### 3.1. 付加疑問文

付加疑問文は、ある一定の複文では、単文と違って、次のような特徴を持つ。

- (20) a. I think Tom likes foreign beers, {*\*don't I/ doesn't he*} ?  
 b. I don't suppose the Giants will lose, {*\*do I/ will they*} ?  
 c. It doesn't seem to me like it's gonna rain, {*\*does it/ is it*} ?  
 —中右 (1994: 167)

(20)はすべて、主節ではなく従節に照応している。(a)では、付加節に doesn't he ? しか容認されない。(b)(c)では、これが R. Lakoff (1969) などに見られる否定辞繰り上げ現象の根拠であるが、think, suppose, seem などある一連の述語に限って、not が従節にあったかのように振る舞い、付加節に従節と照応した肯定しか容認されない。<sup>3</sup>

この付加疑問文の扱いに関しては、次のような問題がある。

- (21) a. 付加節が、主節ではなく、従節と照応する根拠は何か。  
 b. 否定辞繰り上げ以外の述語にもこの現象が見られるがそれはなぜか。

3 ただし、Matthews(1991: 44)によると、彼の判断では、(20a)のタイプの I think he's there, isn't he? は不可であり、don't I しか許さない。isn't he? が可能となるには、I think he's there と isn't he? がそれぞれ独立したイントネーション・グループを形成し、I think he's there. Isn't he? となり、「あとから思いついた確認 (after-thought confirmation)」を表す場合であるとしている。ただし、彼の判断では、I suppose he's there, isn't he? や I don't think/believe he's there, is he? は OK とされており、特になぜ suppose だけが肯定と言えるのかよく分からない。筆者の調査でも、I don't think 型に do I? をもってきた人が10人中2人いた (Matthews は?としている)。これらの人は、規範的、文法的に主節と照応するのが規則だと思ってそう

- c. なぜ付加節が肯定で照応するのか。

### 3.1.1. なぜ従節と照応するのか

(21a)については、中右(1994)は、従来の否定辞繰り上げ説とは違い、この種の複文の主節がすべて「モダリティ」の機能をになっているからであるとしている。すなわち、付加疑問は命題と照応するものであり、(20)の主節は命題とは考えられず、瞬時的現在における話し手の心的態度を示すとしている。以下の文の主節は、モダリティ表現ではないため、従節に照応しない付加疑問となっている。

- (22) a. I always think things are different, {*don't I* / \**aren't they*} ?  
 b. I am imagining that there are ghosts in this room, {*aren't I* / \**aren't there*} ?  
 —以上、中右(1994)  
 c. \*He doesn't suppose the Yankees will win, *will/won't they*?  
 d. \*I didn't suppose the Yankees would win, *would(n't) they*?  
 —以上、Horn(1978a)

(22a)は、「いつも...と考えている」という意味で、瞬時的現在ではない。(22b)は「想像力を働かせる」という imagine 本来の意味で、「思う」という思考動詞の意味ではない。(22c)は主語が3人称、(22d)は過去形となっており、それぞれモダリティとしての働きはしていない。しかし、モダリティ表現であるのに付加疑問文の従節照応を許さないものがある。ひとつは明らかに否定辞繰り上げ述語である *likely* と、そうではない *possible* である。

- (23) a. \*It's likely that they've left the phone off the hook, *haven't they*?  
 b. \*It's possible that we'll be arriving right on time, *won't we*?  
 —以上、Hooper(1975)  
 c. It is possible that we'll be arriving right on time, *isn't it*?  
 —中右(1994)

---

しているのか、I suspect he's there, {\**isn't he?* / *don't I*} ?の *suspect* と同じように、*think* を単なる弱い法的な意味と考えずに、命題的な主節の機能を持っていると考えるからそうしているのかよく分からない。このように、(20a) (20b) の一見何の問題もなさそうな例でも母国語話者の直観には異同が生じる。

(23a)は *It's not likely that they've..., have they?* としても不可であった。Hooper (1975) は *likely, possible* を非断定的述語 (nonassertive) とし、従節照応を許すものは、弱い断定的述語 (weak assertive) で、強い断定的述語 (strong assertive) や *likely, possible* のような非断定的述語は主節照応しか許さないとしている。さらに、中右 (1994: 172) は、*possible* が (23c) のように主節照応であるのは、話し手の主観的判断というより、客観的な命題内容を表すからだとしている。これには、二つ疑問点がある。一つは、否定辞繰り上げ述語である *likely* は付加疑問の従節照応が不可能で、同じ否定辞繰り上げ述語である *think, believe, suppose* など多くの動詞は可能であるという点である。もう一つは、*possible* が中右の言うように、命題内容を表す述語であるかどうかである。通例、*It is possible that...* はモダリティ表現として位置づけられており、*Possibly* と言い換え関係にある。意味的に命題を表すかどうかには疑問が残る。

では、従節照応を許すものと許さないものの境界線はどこかということ、主観的表現か、客観的表現かによるようである。中右 (1994: 172) もこの点に言及しているが、モダリティ表現であるかどうかに焦点をおいており、主観、客観の議論に踏み込んでいないように思われる。Lyons (1977: 797) は、*I am sure, surely, certainly, he is sure to* などを 'subjective epistemic modality' (主観的陳述緩和的法性表現) とし、*It is certain/sure, It is likely, there is a certainty, It is possible* などを 'objective epistemic modality' (客観的陳述緩和的法性表現) と呼び、前者はすべて話し手の主観的表現であるが、後者は客観的表現であるとしている。<sup>4</sup> (24a) は人によって容認度が異なる。

- (24) a. *It is not sure that he will succeed, is it?*  
 b. *I'm not sure that he will succeed, will he?* ー村田 (1982: 153)

(24a) (24b) の付加疑問の違いに見られるように、客観的表現は主節照応、主観的表現は従節照応が基本である。中右 (1979, 1994: 172-173) が (23c) (あるい

4 Matthews (1991: 45) によると、法助動詞や法副詞以外の陳述緩和的法性 (epistemic modality) を表す分析的表現 (analytic expressions) を、以下のような表現としている: *I think/ I believe/ I know/ I doubt/ I don't think/ I don't believe/ I don't know/ I don't doubt/ I guess/ I suspect/ I'm sure/ I'm certain/ I'm not sure/ I'm not certain/ It's possible/ It's probable/ It's likely/ It's certain/ It's impossible/ It's improbable/ It's unlikely/ It's uncertain/ It's*

は(24b))を「命題」とするのはあくまで、主節照応という統語論的証拠からにはほかならない。しかし、例えば、It is possible that...と同義とされる Possibly は、そもそも付加疑問が不可能ではない。これは、筆者のインフォーマントによると、容認度に差があるが、possibly が It is possible that...より幾分か主観的なためと思われる。

- (23) c'. *Possibly, we'll be arriving right on time, won't we?*

I think にせよ、I don't think にせよ、これらの主観表現が述べているのは、命題に対する肯定的あるいは否定的判断が100%ではないことを自分の判断として述べている。ところが、付加疑問自体は、特に相手に同意を求める、上昇調の発話の場合は(「...でしょう」の意味)、話し手がその事柄の真実性に自信・確信がもてず、疑念を抱いている場合である。それゆえ、主観的な100%ではないともとから言っている判断をさらに、(付加疑問で)確信がなく、疑念を抱いていると述べることはできないのである。しいて付加疑問を使うならば、主観的に判断されているほうの命題(従節)を付加疑問化するのならかまわないことになる。

### 3.1.2. 否定辞繰り上げ以外の述語

次に(21b)の、否定辞繰り上げ述語以外の述語にもこの従節照応の付加疑問が見られるという問題について考えてみよう。以下の Cattell (1973) からの例を見られたい。

- (25) a. *I know that it's not very important, is it?*  
 b. *I don't know that it's very important, is it?*  
 c. *I'm sure that's not right, is it?*

---

conceivable/ It's unconceivable/ It's obvious/ It's clear

この中で、話し手の関与(commitment)がどのくらいかを、完全(full)、部分的(partial)、ゼロ(zero)に分けている。客観的表現はその中のゼロに当たると思われるので、拾い出してみると、It's possible/ It's probable/ It's likely/ It's certain/ It's impossible/ It's improbable/ It's unlikely/ It's uncertain/ It's conceivable/ It's unconceivable とすべて It で始まる表現であった。中右(1994: 172)がこの種の表現を命題とし、モダリティに入れてないのは彼の階層意味論の中に収まらないからである。

- d. *I'm not sure that's right, is it?*
- e. *I can't see that it matters, does it?*
- f. *I'm not aware that the question has ever been discussed, has it?*
- g. *I'm not certain that it's the same as the previous one, is it?*

(not) know, (not) sure, (not) see, (not) aware, (not) certain はすべて否定辞繰り上げ述語ではない。例えば、付加疑問を取り除いた(25a)と(25b)、(25c)と(25d)は意味が違うからである。ただし、これらの述語は従節が真であることを前提とする叙述的 (factive) な述語ではない。例えば、(25a)は中右 (1994: 173-174)によると、「あれはきっとあまり大事じゃないと思うけど、そうじゃない」という意味で、I know は I'm sure/certain に近い意味を持ち、話し手の強い確信を表す。それに対し、(25b)は「話し手の側の不確かさ」を表し、肯定命題に対する否定的態度の表明である(中右, *op. cit.*) (このように、意味が違うところから、中右は否定辞繰り上げ現象そのものの存在を否定している)。この両者に従節照応の付加疑問がつくのは、I know/ I don't know が話し手の側の確信/不確かさというモダリティ表現であるからということの中右は示唆している。

Horn (1978a: 155) は否定辞繰り上げがなくても従節照応の付加疑問がつくのは、(25b)が It isn't very important という否定命題の弱い断定を表すからだとしている。Horn は Hooper (1975: 105) から付加疑問形成の仮説をひいて説明している。

- (26) A tag question may be formed from the main assertion of a sentence if it is a speaker assertion about which the speaker may express doubt. (付加疑問は、もし話し手がそれについて疑いを表す話し手の断定ならば、文の主断定から作られる。)

(26)の仮説は、付加疑問は弱い断定的述語の補文(従節) (疑いを示す断定ならば弱い断定である)に照応することを述べている。ところが、Horn (1978a: 155) は(25a)の I know..., is it? を認めない。それは、I know という表現が、話し手が命題に対して不確かである (疑いを示す) と思っていないからだとしている。つまり、Hooper の言葉で言えば、弱い断定的述語ではないからということになる。筆者の調査では、主節が肯定の(25a)はほぼ不可(OK が1人、?が1人、不可が4人)、(25c)は(25a)ほど悪くはないが、非常に不自然(OK が2人、不可

が3人) という結果が出た。これは、I know, I'm sure が I don't know, I'm not sure に比べて、「思う」系の判断動詞(中右流に言うともダリティ表現)ととれないからであろう。

ただし、Horn は is it? という肯定の付加疑問が付かないと言っているだけで、次例のような否定の付加疑問は排除していない。

(27) I know you've been waiting a long time, *haven't you?*

—Hooper(1975)<sup>5</sup>

I know..., is it? という肯定の従節照応に対する判断の揺れは、筆者の考えでは I know をどれだけ主観的と感じられるかによると思われる。Horn 流に言う(25c)の I'm sure..., is it? もおかしいということになる。筆者の調査では、OK とする人も不可とする人もおり、(25a) (25c) の両方とも判断が揺れていた。

### 3.1.3. なぜ付加節が肯定か

では、最後の(21c)の問題に移る。通例は(20b) (20c)の付加節には肯定がくる。これは、生成文法の初期では、否定辞繰り上げ変形がかかった証拠だと見なされており、意味的な議論がなされていなかった。初めて付加疑問そのものを考察したのは、Cattell (1973) である。Cattell は I don't think に代表される否定辞繰り上げ述語を 'buck-passing verbs' (責任転嫁動詞: 否定をうしろの従節に転嫁させるからこう呼んだものと思われる。Cattell が使っているだけでその後一般的な呼び方にはなっていない) と呼び、否定の繰り上げには疑問を呈している。そこで問題なのは、なぜ従節が肯定なのに、付加節も肯定であるのかである。簡単に言うと、Cattell はこの付加疑問を「肯定×肯定」型の付加疑問としている。

彼はまず単文での「肯定×肯定」型の付加疑問を考察している。

(28) a. The book is obscene, *isn't it?*

b. The book is obscene, *is it?*

5 この know の意味は、「確信している」という semi-factive な意味である。「事実として知っている」という factive な意味ではない。factive なら従節照応の付加疑問は不可である。?I know (that) he has left, *hasn't he?*—小西(編)(1980: 836)

よく知られているように(28a)は、相手の意見を求める場合(上昇調で「…でしょう」の意味)と同意確認を求める場合(下降調で「…ですね」の意味)の2通りに分かれる。この両者に共通しているのは、話し手はとりあえずは自分の意見を相手に提供し、それに意見を求めたり、同意確認を求めたりしていることである。ところが(28b)は Cattell (1973: 615) によるとそうではない。話し手は主節を自分の意見としては提供せずに、それが自分の意見であるかどうかを尋ねているという。Cattell 以前に、小西 (1970: 272-275) は、「(You'd like it, would you?は)…陳述部(主節)のところで多少ともぼんやりと相手の発言を反復して口に出したが、付加疑問部のところで急に我に返って、それを問い直してみたといった趣がある。つまり、『君はそれが好きだって…なに、本当か』くらいの意味になる」と同じ趣旨で述べている。<sup>6</sup>

では、この意味が I don't think the Yankees will win, will they? 型に当てはまるであろうか。Cattell のいうところによれば、the Yankees will win は話し手自身の意見とはなっておらず、相手の意見を求めていることになる。つまり、相手の言った言葉をいわばエコー的に繰り返し、「ヤンキーズが勝つのだって。そうではないと思うけど、どうだろう」という意味であることになる。I don't think 型の「肯定×肯定」の付加疑問のこの意味が正しければ、否定辞繰り返し上げはいらないことになり、それはまさに Cattell の意図するところである。

Cattell のいう意味に筆者が疑問に思うのは、次の2点である。まず、もし「肯定×肯定」の付加疑問の意味がこの型にあるとすると、I don't think と知的意味が同じとされる I think not 型にも付加疑問にすると同じ意味を認めなくてはならなくなる。ところが I think not 型は I think the Yankees will not win, will they? となり付加疑問は「否定×肯定」で通常の極性不一致の付加疑問である。次に、実際に相手の言った言葉をエコー的に繰り返し、話し手が自分のものとしていない (commit していない) のであろうか。実例で考えてみよう。

6 このタイプは主節が下降調で、付加疑問部が上昇調である。もう一つのタイプは、主節、付加疑問部とも上昇調で、こちらが口語的には多く用いられるとされている。この意味は、「陳述部に含まれた疑問の意味を補足・強化する役割を付加疑問部が負っている」(小西(1970: 274))とされる。様々な emotional な意味を付け加えているとされ、話し手の満足・驚き・苛立ち、疑い・皮肉などを表す。Cattell (1973) は R. Laokoff (1969) が「肯定×肯定」の付加疑問には皮肉が感じられるというのを、そうではないと述べているが、小西のいう意味を見逃している。



- (29) “I do it. I do it. No’ to worry, Gaffer, I do it.” “That’s better. I don’t like when people argue, Louie. You ought to know that by this time.” He swung round on the ball of his foot as the other winced and moved out of range. He smiled. “It’s all right, Louie, I’m not going to hurt you... yet. ***I don’t think*** I have to tell you to keep your mouth shut, ***do I?*** One cheep out of you and Maria will be putting down an instalment on a nice marble headstone. You understand, Louie.” — LOB L10 (「やるよ、やるよ。心配はいらないよ、ガファー、やるよ。」「それがいい。がちゃがちゃ言うのは嫌いなんだ、ルイー。もう分かってもいい頃だ。」彼がルイーの足の指の付け根の上でくるっと回ると、ルイーのもう一方の足がぴくっと動き、はみ出した。彼は笑った。「いいんだよ、ルイー。お前を傷つけたりしない。まだな。口を閉じろと言わなくてもいいと思うんだが、どうだろうな。ちょっとでも声を立てたら、女房のマリアが、立派な大理石の墓石の月賦を積み立てることになるぜ。分かったな、ルイー。」) (do I?は I have to に照応している。)、

(29)は Cattell の解釈の反例である。この話し手は、I have to tell you...の内容を自分の意見として把握していないということはない。むしろ、意味構造は I think I don’t have to tell you..., do I?と同じで、控えめに、確信がなさそうに言うことで、かえって相手を脅していると解釈できる。(20)のところで述べた Matthews (1991: 44) が、I think he’s there, isn’t he?を afterthought として I think he’s there. Isn’t he?と解釈しているのと同じく、I don’t think 型でも、自分の確信のない意見を付け足しとして、もう一度相手に確認していると思われる。これは、まさに上述した「否定×肯定」の通常の付加疑問の意味にはかならない。以下は、BNC Sampler (British National Corpus のサンプル版で 500万語のコーパスが収録) からの例である。BNC Sampler は前後の文脈情報がなく、1文しか検索できないが、すべて話し言葉である。(29)と同様に、付加疑問でもう一度相手に確認しているような内容となっている。

- (30) a. This could be *I don’t think* acid spends itself as it sits in a bottle *does it?*  
 b. *I don’t think* you meant that *did you?*  
 c. *So I suppose* that was about two and a half minutes *wasn’t it?*  
 d. they can’t necessarily give you more er erm don’t suppose you

- want to get me a cloth *do you*?
- e. *Don't suppose* any girls give her shit *do they*?

このように見てくると、Cattell の I don't think 型の付加疑問に対する考察は、正しいとは思われない。「肯定×肯定」の意味ではなくて、「否定×肯定」の意味である。そうすると、統語的な否定辞繰り上げ操作の正否は別にしても、従節に何らかの意味的な否定が及んでいると考えざるを得ない。

以上、I don't think 型の付加疑問について3つの観点から見てきた。付加疑問がつく I don't think 型の述語は、中右 (1994) のモダリティ論や、Hooper (1975), Horn (1978a, 1978b, 1989), Horn and Bayer (1984) の弱い断定あるいは不確かさ (uncertainty) を表すという論があるが、本稿では、主観的な表現であるという立場をとった。さらに、付加疑問の意味は通常の「否定×肯定」の付加疑問がベースにあり、話し手が不確かな自分の意見をもう一度確認している場合であると結論づけた。

### 3.2. 否定辞繰り上げ述語について

#### 3.2.1. 否定辞繰り上げ操作

中右 (1994: 173-175) は、否定辞繰り上げは存在しないという立場で、以下のような議論をしている。その証拠に、以下のような例は、否定辞繰り上げを想定すると困ることになるからと述べている。

- (31) a. *I don't think for a moment* that he believed my reason.  
 b. \*I {*never/ don't ever*} *think* that John will leave *until* tomorrow.
- (32) a. *I don't believe* that you two have *not met*.  
 b. *I can't believe* that a map of the U.S. hangs on the wall.  
 c. *I wouldn't have thought* anyone would object.
- (33) a. *I don't suppose* that John *may* like this movie.  
 b. *I don't think* that you *need* worry.  
 c. *I don't suppose* that *many* people will come to the party.

これらはすべて、否定辞を従節に戻すと意味が違ってきたり、戻すことができない例である。(31a)は not... for a moment で never の意味を表しており、not だけが従節にあったとは考えられない。(31b)は主節の not は従節にまで及ん

でおらず、not...until の解釈ができない。(32a)は、従節に not を戻すと二重否定の意味となり、意味が違って来る。(32b)は I can't believe と I can believe とでは意味が違う。wouldn't have thought も would have thought とすると意味が違って来る。(33a)は may > not が not > may に作用域が変わるので意味が違ってしまふ。ところが、(33b)は not > need と need > not は意味が同じである。(33c)も作用域の関係で、not > many と many > not では意味が違う。以上が中右の説明であり、それゆえ、「否定辞繰り上げには多様な例外現象が伴う。...主節の否定辞はもともと主節にあったとみる立場に立てば、上記の例はすべて主節が否定を含んだモダリティ表現であるという結果になる」(中右(1994: 175))。

しかし、この説明はそれぞれ次のように反論できる。(31a)は、I never think という意味であるが、これはモダリティ表現ではない。つまり、I don't think に見られるような、不確かさやぼかし表現であるという意味ではない。中右流に言うと、命題表現に属するものである。今まで述べてきたように、「...ではない」という主張を和らげる働きこそ、中右の言うモダリティ表現である。I never think は、「決して...と思わない」と、思考作用を意図的にしていないことを述べている。I は動作主 (agent) である。I don't think は非意図的な「頭に浮かんでいない」という意味である。(31b)も同様に、命題表現だからこそ、否定が従節に及んでいない。(32a)は、筆者のインフォーマントによれば同じ意味であるという。「会わなかったと思わない」と「会わなかったことはないと思う」とでは実質的な差がないと思われる。(32b) (32c)も(31a)と同じで、モダリティ表現ではない。(33c)は、従節に not が入った形を I suppose that many people will not come to the party.ではなく、I suppose that not many people will come to the party.と解すべきである。

おそらくは、否定辞繰り上げを想定すると、(33a) (33b)が助動詞のパラダイムに大きな欠陥が生じる例であろう。Horn (1978a: 198)は以下の#がついた助動詞は、否定辞繰り上げをすると意味が変わるものであるとしている。

- (34) *I don't think you {# can, #?may, should, ought to, better, #?must, # have to} leave.*

例えば、should は I think you should not leave.としても、「とどまった方がいい」という提案 (suggestion) をしている意味であるが、can は I think you cannot leave.とすると、Horn によると「とどまってもいい」という許可である

が、I don't think you can leave.はその意味は表さない。また、must の場合、I don't think you must leave.は「出ていかなければならないとは思わない」すなわち「ここにいた方がいい」という助言に近い意味であるが、I think you must not leave.は「出ていってはいけないと思う」という禁止の意味である。このように見てくると、否定辞繰り上げを許す助動詞のほうも、Horn (1978a, 1978b, 1989) のいう尺度の中間 (mid-scalar) を表している (次節参照)。can, may は尺度上で弱いほう、must, have to は強いほうに属する。should, ought to, (had) better だけが中間である。ちなみに、may と must に?がついているのは、それぞれ話し手が課す「許可」「義務」をいうからである。話し手が課しているのに、I don't think といって話し手がそうは思わないというのは矛盾した行為だからである。

逆に、I think not 型で否定辞が繰り上がらない例も見られる。これも、just can't が尺度で言うとき強いほうに属しており、助動詞と同じように、否定辞繰り上げができない一つの制限だと思われる。

(35) **Han Solo:** Well Princess, it looks like you managed to keep me here a while longer.

**Princess Leia Organa:** I had nothing to do with it. General Rieekan thinks it's dangerous for anyone to leave the system until they've activated the energy shield.

**Han Solo:** That's a good story. *I think* you *just* can't bear to let a gorgeous guy like me out of your sight.

**Princess Leia Organa:** I don't know where you get you delusions, laser brain!  
—*Star Wars: Empire Strikes Back* (映画台本)

インフォーマントによれば、これを I don't think you just can bear to... とはできない。あるインフォーマントは、I just don't think you can bear to... とできるかもしれないと述べてくれたが、これでも原文とは意味が異なる。

このように、制限は付くが、中右の否定辞繰り上げへの反論も修正すべき点があると思われる。中右 (1994: 185) ははっきりと I don't think 型はモダリティ内否定であると述べている。つまり、肯定命題 (従節) に対する否定的態度の表明である。しかし、否定辞繰り上げを認めないこの説明では、以下のような基本的な例はどのように説明すればよいのであろう。

(36) *I don't think that the Giants will win, will they?*

(37) *I don't think they'll hire you until you shave off your beard.*

—Horn (1989: 347)<sup>7</sup>

前節でも述べたが、従節に否定が関係ないとする、「肯定×肯定」の付加疑問がどうしても解せない。中右はこの点は明確ではないように思える。同様に、(37)でも *until* が NPI (否定対極表現) であると説明できない。あえて、*I don't think* を否定の法副詞と同列に置くと、例えば、*unbelievably, unfortunately* は可能になるはずだが、*until* 節は不可になるのが分かる。否定辞の *un-* は主節には及んでいないことが分かる。

(38) \**Unbelievably/ \*Unfortunately, they'll hire you until you shave off your beard.*

cf. \**They'll hire you until you shave off your beard.*

筆者は、第2節で *I think not* 型は機能的に独立していることを述べ、*I don't think* 型への否定の繰り上げは疑問があることを示唆した。ただし、それは *I don't think* 型が従節と否定の関係を持たないということではない。Horn (1978a, 1989) のいうように、例外や異言語間での異同は多いにしても、(36)(37) はやはり説明しなければならない。

太田 (1980: 519) は、かつての解釈意味論からの解決方法を出しており、否定辞が繰り上がる代わりに、意味的に主節の否定辞が、これらの述語を通して従節にかかるように解釈されるという、「橋」の概念を述べている。結局、この「橋」の働きが、中右も述べているように、*think* 一つをとってみても、大幅に制限されているため、例外が生じると言うことである。例えば、太田 (1980: 535)

7 Horn (1989: 347) によれば、*guess* を否定辞繰り上げ述語とはしない人もいるし、する人もいる (%で表示)。さらに、*hope* は否定辞繰り上げ述語ではない。

(i) % *I don't guess they'll hire you until you shave off your beard.*

(ii) \**I don't hope they'll hire you until you shave off your beard.*

*guess* の場合、Brown Corpus と LOB Corpus では *I don't guess* はゼロであった。以下は両方の実例。

(iii) 'OK,' he said. '*I don't guess* we've got much choice.' —P. Benchley, *Jaws*

(iv) 'Oh,' she said. '*I guess* this *isn't* the bathroom is it?' —C. Webb, *The Graduate*

があげている次の例を見てみよう。

- (39) a. I don't think        all the girls                left.  
       b.                        many girls  
       c.                        those many girls

(39a) (39b) の not は all, many にかかるように解釈されるが、(39c) は those があるため、not は many にかかることができず、those many girls didn't leave のように解釈される。(39a) (39b) のように、not が従節の語句に対してなるべく広い作用域を持つように解釈されるのが原則であると太田は述べている。それでも、(39c) のように例外が生じる。また、次の例も例外となる。

- (40) *I don't believe that several senators are communists. (≠ \*I believe that not several senators are communists. / = I believe that several senators are not communists.)*

これには、太田 (1980: 536) が述べているように、I don't think が topic としての働きを持つことからの解決策が必要である。(40) は誰かが、Several senators are communists. と述べたものを繰り返し否定したような文である。それゆえ、not は several にかかるようには解釈されない。このように、否定が「橋」として、従節に及んでいるという方策を見つけたにしても（おそらくは意味論的にはこれが唯一の解決法であろうが）、様々な例外が生じる。おそらくは、意味論的には I don't think 型と I think not 型が同じ知的意味を持つ「橋」の解釈、語用論的には「ぼかし表現」としての解釈、機能的には第2節で主張した topic としての解釈が必要であろう。問題は、どれがどんな場合に先行して働いているかである。

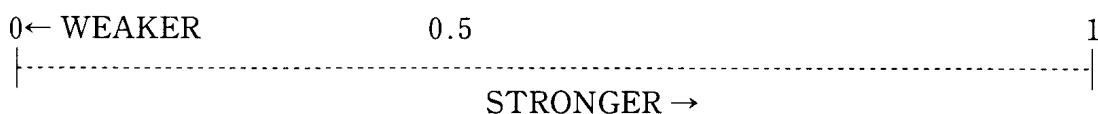
最後に問題となるのは、I don't think が中右 (1994: 185) のいうように、「肯定命題のモダリティ否定」なのか、I think not と同じ意味の「否定命題のモダリティ」なのかである。もし筆者がいうように、両者では topic と comment、間接（ぼかし）表現と直接表現という機能的・語用論的な違いしかないのであれば、意味論的には両者には違いがないということになる。think に代表される否定繰り上げ述語（その他 seem, look, appear, feel as if などの知覚動詞、likely などの蓋然性の述語 (Quirk, *et al.* (1985: 1033-1034)) は、話し手の確信度を減じる働きをする。I don't think は、肯定命題を確信しないとして程度

を減じているのではない。あくまで、肯定命題を否定してその確信度が低いと述べているのである。Halliday (1994: 354-355)は、I don't think を「思考(というモダリティ)の否定」としたり、it isn't likely を「蓋然性(というモダリティ)の否定」とするのは表面的には意味をなさないという。ただし、自然言語で意味を持っているのは、このモダリティが命題として仮装しているからで、Yes,/No を問えるからだという。要するに、表面的にはモダリティの否定と見えながら、実質は命題否定と考えることができる。この証明には、次節で述べる Horn (1978a, 1978b, 1989) の「尺度の中間 (mid-scalar)」という考え方が必要となる。

### 3.2.2. 尺度の中間 (mid-scalar) と短絡回路的含意 (short-circuited implicature)

尺度の中間という考えは、Horn (1978a, 1978b, 1989) が否定辞繰り上げ述語に対して与えた考え方である。例外は多いが、一般に否定辞繰り上げを許す述語(統語的な否定辞繰り上げという意味ではないことに注意。ある述語  $p$  について、 $\sim p$  と  $p\sim$  の意味が同じである述語について言っている)は、以下の尺度上で、中間 (0.5) にくる述語である。

(41) be able	believe, suppose, think	know, realize
be possible	be likely, probable	be certain
	figure to	be clear, evident, sure
	seem, appear, look like	be odd, significant, tragic



may, might	be supposed to	must, have to
can, could	should, ought to, better	need, be necessary
allow, permit, let	be desirable, advisable	be obligatory mandatory
be allowed	be a good idea (to)	make, cause, force
be legal, ethical	want, choose, intend, plan {to/on}	insist order, demand require

Horn (1989: 324-325)

上段が認識的 (epistemic)、下段が義務的 (deontic) な法性表現を表す。ある述語が別の述語より強いかわかりについては、論理的に含意 (entail) するかどうかで決まる。

- (42) a. I believe he's ill.  
 b. I know that he's ill.  
 c. I don't know that he's ill.  
 d. I believe, in fact I know, that he's ill.

太田 (1980: 521) によれば、(42b)は(42a)を論理的に含意し (entail)、(42a)は(42c)を会話的に含意する (con conversationally implicate)。 (42d)はその含意をうち消している。そのため、knowのほうがbelieveより強い表現である。

そうすると、ある述語 p について、 $\sim p = p \sim$  であるかどうか (否定辞繰り上げ述語であるかどうか) は、述語の強さによって決まってくる。Horn (1989: 325) は、次のようにまとめている。

- (43) a. 尺度上で弱い述語の否定は、対応する否定の尺度で強い述語表現である。

例: possible の否定は impossible、allow の否定は forbid

- b. 尺度上で強い述語の否定は、対応する否定の尺度で弱い述語表現である。

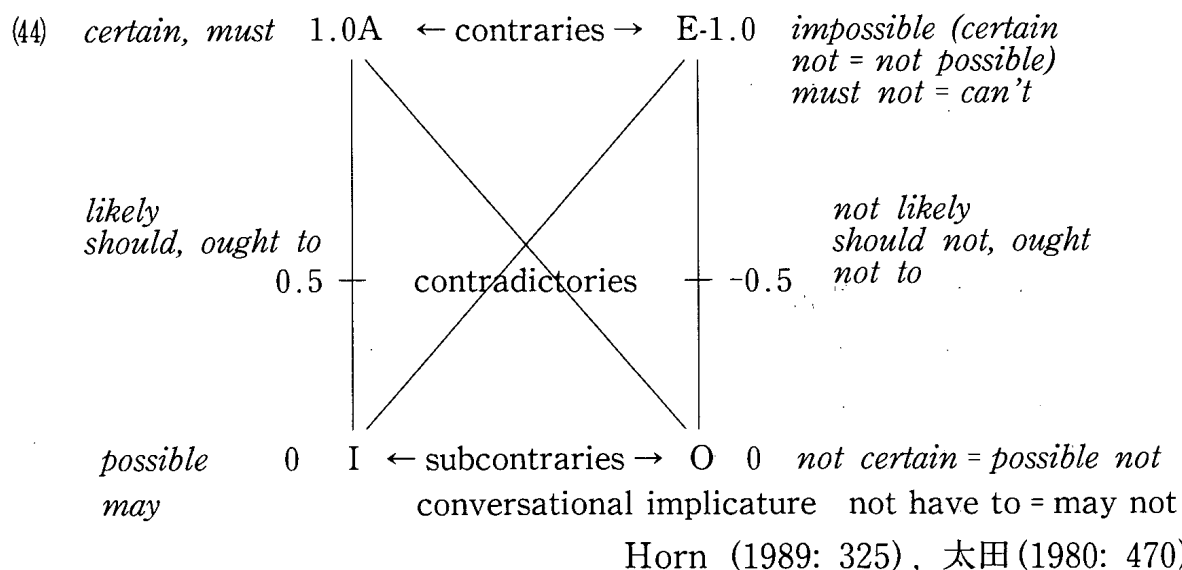
例: certain の否定は not certain = possible not、have to の否定は do(es)n't have to

- c. 尺度上で中間の述語の否定は、対応する否定の尺度で中間の述語表現である。

例: likely の否定は not likely、advisable の否定は not advisable

(43a) (43b) から分かるように、両極の述語が否定されると、対応する否定の尺度で反対の極になる。この論理関係を図示すると、以下のようになる。





certain (確かだ) の否定は not certain (確かでない)、つまり possible not (ない可能性がある) となり、確実性がゼロであることを表す。逆に、possible の否定は impossible(not possible)、つまり certain not となり、可能性が100%ない(…でない確実性が100%である)ことを述べている。このように、両極の述語についての否定は反対の極にあり、それが否定辞繰り上げ述語であるかどうかについては、certain not と not certain の位置を見ても分かるように、両極に位置しており、違いはきわめて大きい。それに対し、likely などの尺度の中間(Hornによると、実際の意味は尺度の中間より少し上)を表す述語では、not likely と likely not の意味の差はほとんどないということになる。

では、意味に違いがないとはどういうことであろうか。ここでは、contradictories (矛盾) と contraries (反対) という道具立てが必要となる。例えば、certain(A)と not certain(O)を両方一度に信じることは不可能である。同様に、possible(I)と impossible(E)も両方一度に真になることはない。これを「矛盾」という。ところが、certain と impossible(not possible = certain not)は、両方信じることはできないが、両方信じないことはできる。これは「反対」になる(subcontraries = conversational implicature の議論は省略。詳しくは、太田(1980: 468ff))。これは、「矛盾」が2分法(dichotomy)で、「反対」が中間段階を認めた3分法ということになる。



(46)	certain	neutral (中間段階)	certain not

では、尺度の中間の述語はどうであろうか。Horn (1978a, 1989: 325-328) によると、likely と外部否定である not likely は「矛盾」、likely と内部否定の likely not は「反対」を表すという。「ありそうだ (likely)」と「ありそうでない (not likely)」を両方一度に信じることはできない。それに対して、「ありそうだ (likely)」と「ないことがありそうだ (likely not)」は両方一度に信じることはできないが、両方一度に信じないことはできる。以下の(46)を参照。

- (46) a # It's *likely* she'll go and *likely* she won't go.  
 b. # I *believe* she'll go and I *believe* she won't go.  
 c. # I *want* her to go and I *want* her not to go.

つまり、(46a)を例にとると、「彼女が行きそうだ」と「彼女が行かないことがありそうだ」はお互いに不寛容 (intolerant) である (排除する) が、「彼女が行きそうだ」といえば、「行かないこともあり得る」という余地を残しており、どちらでもないということができる (Horn (1989: 326))。それに対し、弱い尺度を表す述語 possible は It's possible she'll go and possible she won't. ということができ、「行く可能性がない」ことと「行かない可能性がある」は矛盾しない、お互いに寛容 (tolerant) である。

これに対し、certain などの強い尺度を表す述語は、(46)と同じように、両方一度に真であることはできない (Horn (1989: 237))。

- (47) # It's *certain* that she'll win and *certain* that she won't.  
 cf. # All of my friends are linguists and all of them *aren't*.

certain と certain not は「矛盾」を表し、「彼女が勝つことが確かだ」といえば、「負ける (勝たない) こともあり得る」とは言えない。この点が、likely と違うところである。

このように考えてくると、「矛盾」は「反対」に包摂される意味であることが分かる。「矛盾」が両方一度に真であることができない関係であるのに対し、「反対」は両方一度に真であることができない関係プラス、両方一度に偽であるこ

とはできるからである。これはまさに2分法と3分法の違いである。not likely は likely に対して「矛盾」、likely not は likely に対して「反対」なのであるから、not likely は likely not に包摂される、すなわち、not likely は likely not を論理的に含意 (entail) する、その逆は真ではないということになる。Horn (1989)はこの点を明確にはしていないが、筆者の考察では、この二つの意味が同じである、あるいは(きわめて近い)同義表現であることをいうためには、「矛盾」と「反対」に関する説明が必要である。

likely は not likely と likely not で意味が違う場合がある。<sup>8</sup>

- (48) a. It's not *likely* that a fair coin will land heads.  
 b. It's *likely* that a fair coin won't land heads.—Horn (1978a: 197)

「公平なコインが表が出る」確率は50%である。(48a)はそれが真である確実性が低いと言っているのであるから、我々の日常の知識(確率が50%であること)と照らし合わせてみて、「偽」と判断される。つまり(48a)は「公平なコインは表が出る確率が少ない」ことはおかしいという判断をされる。それに対して(48b)は「公平なコインは表が出ないだろうということはあり得る」と述べており、表が出ない確率を話し手が自分で判断して、ないだろうといっているにすぎない。すなわち、全体としては「真」になる。Hron (1989: 327)は従節の確率が50%であると、否定辞繰り上げにならないとしか述べていないが、これは確率の問題ではなくて、従節に一般に動かしようのない事実をもってくるかどうかである。例えば、It's not likely that the earth is round.と It's likely that the earth is not round.と比べてみても同じである。前者はほとんどの人が「偽」とするし、後者は間違った命題の断言にすぎないという。ところが、(48)や the earth is round を I don't think/I think not にすると、likely とは違い同じ意味になる。これは、述語の性格の違いで、likely が「真」「偽」の判断に直接関係する蓋然性の法形容詞であるのに対し、think が意見を述べる判断の動詞であ

8 Quirk, *et al.* (1985: 1034) は likely を完全に否定辞繰り上げ述語とは認めていない。また、probable も疑問を呈している。さらに、very がつくると違う意味であると述べている: It *isn't* very *likely/probable* that oil prices *will* fall this year. (今年は原油価格が下がることはあまりありそうにない)/ It *is* very *likely/probable* that oil prices *won't* fall this year. (今年は原油価格が下がらないことが大いにありそうだ)。これも、likely, probable の度合いが人によって違うからであろう。Quirk, *et al.*はかなり高いと見ているものと思われる。

るためであろう。この点も Quirk, *et al.* (1985: 1034) が蓋然性の法形容詞を否定辞繰り上げ述語に入れていない理由に入れてもよいと思われる。Horn (1978a: 197) は likely を否定辞繰り上げ述語に入れている。その理由は、NPI である until と共起するからである。

- (49) It {*\*isn't possible/ \*is impossible/ isn't likely/ is unlikely/ \*isn't certain*} that Mary will leave until after the show.

では、「矛盾」「反対」の議論に戻る。Horn (1989: 328-329, 343ff), Horn and Bayer (1984) は、I think not 型が I don't think 型へ（統語的・意味論的に）派生したとは考えていない。I don't think 型が I think not 型を含意 (implicate) する、I think not の意味は implicature であると考えている。すなわち「矛盾」否定から「反対」否定へ補強 (strengthen) されると考えている。その含意は、一般的な会話の含意でもなく、慣習的含意でもない、その真ん中に位置する短絡回路的含意 (short-circuited implicature: 以下 SCI) であるという。SCI は本来は Morgan (1978) が(50b)の間接発話行為に対して考えだした含意の一種である。

- (50) a. Close the window.  
b. Can you close the window?  
c. Are you able to close the window?  
d. Do you have the ability to close the window?

文字通りには能力の意味である(50b)がなぜ慣習的に(50a)の依頼の意味になるのか、そして、(50c)(50d)の同義表現がなぜ依頼の意味を持たないのかは、間接発話行為 (indirect speech act) の名の下で様々に解説されてきた。まず、この含意は、関係の公理 (Relation Maxim) を使った会話の含意ではないかという議論がなされた。ところが、会話の含意は分離不可能 (non-detachable) でなければならない。それには、(50c)(50d)も依頼の読みが与えられなければならないが、そうではない。その点が謎である。という議論がある。次にそれに対して、会話の含意として確立してしまい、それが慣習的な含意になるものがあるという、間接発話行為の理論がある。これを一歩進めたのが、Morgan (1978) で、SCI を提唱している。SCI は本来的には会話の含意と同じように、計算可能 (calculable) であるが、慣習的になっていると見られるため、話し手

は計算可能と思っていない。(50b)が本来の疑問の意味を保持して(50a)を意味するのは慣習的 (conventional) であり、使用上の慣習 (usage convention) になってしまっているとする。同じような表現に、Break a leg! (成功を祈る) や You can say that again! (その通りだ) がある。よく知られているように、(50a) (50b) に please をつけることはできるが、(50c) (50d) には不可能である。

Horn は I don't think が I think not の含意を持つ (「矛盾」読みが「反対」読みになる)、その含意を SCI と呼んでいる。つまり、NPI の until が従節にあっても (51a) が可能であるのは、(51b) から派生したのではなく、(51b) を慣習的に含意しているからだとする (Horn (1989: 347), Horn (1978a))。

- (51) a. *I don't think they'll hire you until you shave off your beard.*  
 b. *I think they'll won't hire you until you shave off your beard.*

この SCI を Horn は婉曲表現 (euphemism) と同じような、R-based implicature だとしている。R-based implicature とは、Grice「量の2番目の公理 (Quantity Maxim)」より、ある表現がそれ以上のことを含意するような場合である。つまり、I don't think のもつ意味は基本的に「ほかし」「不確かさ」であり、その点では、婉曲表現と同じ性質を持つという。

Horn のいう SCI は正しいであろうか。Horn は決して明確ではないが、「矛盾」と「反対」の関係は成立するはずである。ところが、依頼表現の SCI と同じ構造を持つとすると、(50b) と (51a)、(50a) と (51b) がパラレルな関係を持っていることになる。さらに言うなら、(51b) が (50a) とは違い、論理的に補強 (strengthening) であるということになる。I don't think 型の持つ語用論的、機能的意味は第2節でふれた通りで、本稿ではそれぞれ独立したものとして扱った。大まかに言うなら、語用論、機能的に別々のものを語用論的に結びつけているのが Horn の一番の難点のように思われる。Horn の分析に一貫してみられるのは、I think not 型への言及がないということである。つまり、I don't think 型の根底にあるのは I think not 型であるという暗黙の了解があり、後者の実際の意味には考慮がなされていない。

この節の目的は I don't think 型と I think not 型の意味論的同値性を検証することであった。そのために、Horn から (Horn もはっきりとふれていない) 「矛盾」と「反対」の論理的包摂性を検証した。ただし、そこから Horn が論証している語用論的含意 (SCI) の考え方に疑問を呈したつもりである。

#### 4. おわりに

以上、否定辞繰り上げについて、機能的側面、語用論的側面、意味論的（論理的）側面から考察した。I don't think 型と I think not 型は、意味論的には包摂関係にあり、同値と考えてよいが、機能的、語用論的には違いがあるという結論である。機能的には、topic (I don't think 型) と comment (I think not 型) の違いがあり、語用論的にはほかし表現かどうかの違いがある。太田(1980: 537) も述べているように、「このような複雑な事象を、統語論、意味論、語用論のどれか一つで片づけようとするのは無理であり」、むしろ、どのような場面で、どの形を使うのがもっとも適切かを考えた方がよいと思われる。

#### 参考文献

- Bublitz, Wolfram (1992) "Transferred Negation and Modality." *Journal of Pragmatics* 18, 551-577.
- Cattell, Ray (1973) "Negative Transportation and Tag Questions." *Language* 49, 612-639.
- Eastwood, John (1994) *Oxford Guide to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. (2nd edition) London: Edward Arnold.
- Hooper, Joan B. (1975) "On Assertive Predicates." In John P. Kimball (ed.) *Syntax and Semantics*, Vol. 4. pp. 91-124. New York: Academic Press.
- Horn, Laurence R. (1978a) "Remarks on Neg-Raising." In Peter Cole (ed.) *Syntax and Semantics*, Vol 9: *Pragmatics*. pp. 129-220. New York: Academic Press.
- . (1978b) "Some Aspects of Negation." In J.A. Greenberg (ed.) *Universals of Human Language*, Vol. 4: *Syntax*. pp. 127-210. Stanford, CA: Stanford University Press.
- . (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: Chicago University Press.
- Horn, Laurence R. and Samuel Bayer (1984) "Short-Circuited Implicature: A Negative Contribution." *Linguistics and Philosophy* 7, 397-414.

- Jespersen, Otto. (1917) *Negation in English and Other Languages*. Copenhagen: A.F. Høst.
- 小西友七 (1964) 『現代英語の文法と背景』 東京：研究社.
- (1970) 『現代英語の文法と語法』 東京：大修館.
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社.
- Lakoff, Robyn (1969) "A Syntactic Argument for Negative Transportation." *CLS* 5, 140-147.
- Lyons, John (1977) *Semantics* 1-2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matthews, Richard (1991) *Words and World: On the Linguistic Analysis of Modality*. Frankfurt: Peter Lang.
- Morgan, J.L. (1978) "Two Types of Convention in Indirect Speech Acts." In Peter Cole (ed.) *Syntax and Semantics*, Vol 9: *Pragmatics*. pp. 261-280. New York: Academic Press.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』 東京：大修館.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理 (Principles of Cognitive Semantics)』 東京：大修館.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味—意味論序説』 東京：大修館.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sheintuch, Gloria and Kathleen Wise (1976) "On the Pragmatic Unity of the Rules of Neg-Raising and Neg-Attraction." *CLS* 12, 548-557.
- Svartvik, Jan and Randolph Quirk (eds.) (1980) *A Corpus of English Conversation*. Lund, Sweden: LiberLäromedel Lund.
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*. (2nd edition) Oxford: Oxford University Press.